コダーイシステムをめぐる討議

（加勢）一般教育の中で行なわれる音楽教育の実態がどういうもので、皆さんがどういう問題意識をもっておられるかそれをお聞きしたいと思います。コダーイシステムについて自分を中心に話ししてきましたので、わからないことがありましたら今から質問にお答えするということでお話ししたいと思います。

（津守）たいへん根本的なことからときおこして言語学や万民の音楽や、いろいろおもしろいことをうかがい、また評価の対象としての音楽ではなくて、子どもの好きなものは、発達過程に合ったものであるというようなことは私どもも原理としては、ほんとうにそうだろうと思いました。

（加勢）コダーイシステムの音楽教育原理といいますと、万民のための音楽教育であるということ、そのためには幼児の音楽教育に非常に重点がおかれているということ、それから、さっきいった意味で、伝統音楽といっても生のものだけではありませんが、その民謡音楽にもとづく歌唱教育、歌による教育がほどこされています。

（A）幼児教育に生かす方法をうかがったのですが、それをそのまま現在の幼児教育の中に生かしていけるのでしょうか。集団の場面で、その子なりにということを考えながら、どのようにやっていったらよいのでしょうか。

（加勢）コダーイは、器楽より子どもが一番音楽を知るのにやさしい方法は歌であり、みんなが一番いい、のどという楽器をもっている、これをならすのが、子どもにとって一番やさしいと思っておられます。楽器というのは、どんなに簡単なものでも何か操作がいります。だけど歌は簡単に声がでます。むしろ、子どものときにはなるべく楽器を使わせないのです。そして純粋な格好で歌だけを歌わせます。ピアノがあっても先生は使いません。

最初のうちは先生にとっても非常にやさしいのです。自分に絶対音感のない先生でもいいわけで、音さ位使ってますけど、子どもの声を聞いてあげて、その子にやさしいところで、その子なりに助けてあげるのです。それこそ万民の音楽というためにた

いへんいいことだと思います。

それと、固定ドでいれないということ、移動ド方式だということが非常に大きな特徴です。みんなの子どもと考えると固定ドは非常にむずかしいのです。ひとつの音を絶対音で和音で教えこんで、かりにできたとしても、ちっとも音楽の横に流れるフレーズ感にはむすびつきません。音楽というものは、なにも、ドレミというソルフェージのことばを正しく読むということが、主眼ではありません。ラ・ラでいいではないか、ア・アでいいではないか、その歌ったそのもの自身が音楽にかなっていれば、それが、最終的な目的であって、それにくっつくための手段としてそれこそ、ソルフェージのソルミゼーションとかあるでしょうが、それが一義的なものになってはいけないと、そういう感覚をパッとつけるために耳で入れなくてはいけない、幼児のときに視覚から入ってはいけないというのです。

子どもの本能はあそびですから、あそばせながらそういうものをいかした耳からの教育を、徹底してハンガリーの場合、小学校の二年位までやっています。それまで、絶対器楽をやらせないし、なるべく使わせません。ですから、初歩ではペンタトニック、五音音階だけの音楽で、次第に七音音階、十二音音階、無調音階と、結局、専門教育はコンセル・バトワール以上においていますから、リスト・アカデミーを卒業するところを頂点として、それで大きな計画ができているわけです。

コダーイシステムを六歳のところで切りまして、日本の桐朋か何かで、ピアノをひいている子と比べると日本の方がすぐれているのではないかというようなはかり方を日本人はよくするのですが、そうするとコダーイ・システムの価値は全然理解されないのです。ハンガリーの音楽教育は上にいくほどよくなっています。日本の場合は上にいくほど止まってしまうので、ふきだまりができてしまうわけで、この点、逆なのです。やはり、人間の本来性にかなっているから、そうなるのだろうと思います。

(B) 耳からの教育・歌を中心にしていく、例外をも認めるということ、たいへん参考になって、そういうふうにやりたいと思うのですが、ほかに方法の特徴的なものがありますか。

(加勢) ハンドサインというものと、サイレントシンギングというものが非常に特徴的です。これは何も、独創的というよりも、それまでに世界で行なわれていて非常にいいというものを、コダーイがコダーイシステムの中でとり入れたものなのです。ハンドサインというのは、先生の音楽的フィーリングがこれに出てきます。子どもが目の前にいれば、それが自然に流動的に出て、人間と人間との交流で子どもを育てるというのが大きな主眼なのです。そこに楽器とか別の道具が入ると、もう間接的になる。何よりも先生は子どもの目をみてあげる。そういう面もちゃんとこの音楽のシステムの中にとり入れられています。

サイレントシンギングは集中力を養成します。これにはいろいろな段階があるわけですが、リズムとメロディーをわけてもできます。最初、リズムだけのメロディーかくしから始まります。これが、メロディー

だったら、たとえば、ドレミソラソミだったら次に、ドレミ…ソミ、何かぬけているかということで、やさしいものから指導していくのです。ひとつのメロディーかくしというパターンから始まって、次は子どもが輪になり、たとえば「きんきらきんの、きんのリング、だあれにあげよ、ランランラン」というのがあるのですが、これを歌いながら歩いているときに先生が手をたたくと、黙る場所ができる。その黙っている間、子どもたちは歩いているリズムの中で、頭の中でリズムを続けながら歌っているわけです。そして、黙ったあと再び歌い出したときに、音程とかリズムとかが狂わずに歌えなくてはいけないのです。

これをやさしいところから訓練していくと、子どもたちが自然に集中力だとか音の構成・フレージングが全部つながって、いろいろな開発がされるのです。このサイレント・シンギングは個人の先生によっていろいろなパターンをたくさんもっているわけです。そういう応用能力は個人、個人の先生の技量によりますが、ひとつの原型として特徴的なことです。

(C) 現在、私たちはコーリューブンゲンとピアノ、それだけのものしかもっていないわけで、たとえば専門家のような技術もないし、コダーイのいうような子どもの発達にあった音楽も知らないのですが、ハンガリーで幼児の教育にたずさわる人はどのような教育をうけているのでしょうか。

(加勢) 教員養成というのは、大切な仕事で、教育とは、人間と人間のぶつかりあいだけに、先生の子どもへの影響力が大きいわけです。それだけにハンガリーでは、人間性の教育も音楽の能力とひっくるめて非常に力を入れています。ともかく先生の質をよくする場所があちこちにできています。いろいろなレベルの学校があります。自分でこういう面が足りないと思ったら、そういう学校へいけばいいのです。

(D) 現在の日本では、子どもは洋楽のヨの字も知らない白紙の状態だとおっしゃいましたが、音楽教育をうける以前にマスコミの影響で世間にあるいろいろな音楽をごっちゃにきいているわけで、そのような環境で育った子どもにもわらべ歌は適しているのでしょうか。

(加勢) ハンガリーのような伝統音楽は、ヨーロッパに近いから理論にぴったりあうわけです。この方式を日本にもってきた場合に、現代っ子にどれだけ身近なものかということですが、ことばの問題があります。日本語は非常に方言が多い。私も経験としてわらべ歌を使ってみたのですが、子どもたちが笑い出してしまうのです。実はハンガリーで統一されたいいコダーイシステムをもってかえってきた、だから純度の高いそれを、日本にきれいにくみかえたかったので、わらべ歌も使ってみたのですが、現場から拒絶反応にあってしまったわけです。私自身も皆さんと同じ問題意識をもっています。

(E) 前にも出ましたように世界はどんどん近くなって、テレビからいろいろな音楽が入ってくると、世界は、均一化していくところで、コダーイの音楽はどういう役割をはたすのでしょうか。これから五十年も百年も先のことですけれど。

（加勢）ハンガリーの場合、テレビも日本に比べたら少ないのです。それから、マスコミからの影響も多くありません。社会全体が日本のように、あちこち方法がいっぱいあってというのではなく、ほんとうに一色しかないので、全然迷いがないし、比較がない。そして、ハンガリーであちこち実情をみますと、考えておられるよりもっともっと自由です。極端に言うと、先生が教材や方法を各自で作っているようなものです。日本は、ひとつ何かあると、皆がとびつくという傾向があるので、コダーイシステムというのはひとつしかなくて、教条主義的に考えてしまいがちですが、それは私たちが考えているほど枠がきちんとしていて、教師も子どももその中へ入れてしまえ、というものではないのです。私はコダーイシステムというものを流動的にとらえてほしいと思います。

（F）移動ドと固定ドの問題ですが、固定ドは小さいときからやっておけば身につくといわれ、固定ドの方がよいといわれます。どちらがよいのかわからないのです。

（加勢）白紙の子どもをピアノに導入するとき、日本ではバイエルを使って指の動きから入っていますね。そうではなしに、なんといっても大事なのは音色ですよね。音色というものと、自分の中の音楽性というものは、実質的にむすびついているのです。ですから、ひとつのピアノの曲をじょうずにひくためには、自分の中で音楽を歌わなくてはいけない。そういう音楽をもつ子どもを育てるのがたとえ、ピアノであれ、歌の分野であれ、幼稚園であれ同じなのです。それがひとつにまとまっているのがコダーイシステムです。日本の場合には器楽教育のために特別な幼児教育をしなくてはいけない、それで、固定ドと結びつくのですけれど、固定ドと、絶対音感とは別問題です。

固定ドで入ってしまったので、ソルフェージでヘ調になったら移動ドでは全然よめないのです。読むということと、自分の中の音楽がつながらないわけです。子どもの感覚は、移動ドだと、ヘ調であれ、ト調であれ、ドミソはドミソときこえるわけでしょう。そして、かりに長い楽曲でハ調で始まって、ト調に転調していた場合に、固定ドだったら調整感に結びつかないじゃないですか。程度が高くなってきたら、どうしようもないですよ。音が開放されて入るという意味で、コダーイシステムはいいと思うのです。固定ドではなしに固定音名なら話はわかりますが。

（G）日本では、幼児期は音楽に対して敏感で、幼児期をのがしたら絶対音感や、リズム感が養われないといわれています。楽器についても、幼児期が適切な時期とされているし、私もそう思いますが、小学校二年生まで楽器をさわらせないというのが、よくわからないのです。

（加勢）ハンガリーでは、いわゆる絶対音感はつけません。ところが実際には子どもたち、ちゃんと絶対音感あるのです。たとえば、ひとつの楽曲を歌う能力は実にあります。これと逆の現象が日本にたくさんあります。私の実験グループで、せっかく持っている絶対音感と音楽とがむすびつかないで、音楽の横の流れ、たとえば、ディ

クレッシェンドとか、クレッシェンドとかフレーズ感とか、まとか、そういう感覚が全然だめな場合がみられます。何も絶対音感がなくたって、そういう大切なものをピチッとおさえる子どももいるわけです。そうすると、絶対音感がどれだけ必要かということにもなってきます。

（加勢）最後に、一般的にいって、数多くの子どもに音楽を教える方法というのがコダーイシステムです。特殊な子どもだったら何やってもいいと思いますよ、スパルタやったって子どもは育ちますもの。でも子どもが音楽を好きになるかどうかは能力とは別問題です。

こういうことがあるのです。去年ある小学校がＮＨＫの合唱コンクールで一等になったのです。その子どもたちが、ことし、中学に入って、私の子どもといっしょになったのですが、その小学校からきた子どもはだれも合唱部に入らなかったというのです。もうけっこうだというわけですね。それで、その評価は、その小学校の音楽教育はたいへんいいということなのですが、子どもら自身は、全国で一等になったという、はなやかな経験をしながらも、全然、音楽が嫌だというわけです。こういう現象をどう見るかということですね。これが、日本の音楽教育の評価のしかただとすれば、これとちょうど逆をいくのがコダーイシステムで、逆を行くところに価値があると私は思っています。

基本だけおさえていれば才能があれば勝手にのびると思います。ただそのおさえているところで教材の問題が出てくると思います。たとえば、子どもにわらべ歌が入っていない、幼稚園で今教えている普通のものが、子どもから自然に出てくる、それに、マスコミからいろいろな種類の歌が入ってくる、それがどう子どもの中でむすびついているかという点ですが、その子どもたち、音楽的には何にもないとしかいえません。マスコミの影響でどういう教育がされたでしょうか、またはされなかったでしょうか。心情的な立派な音楽まで理解することができるためには、やはりちゃんとした道すじがあってしかるべきで、子どもが好きなら何でもいい、と与えるならそれは放任主義だと思うのです。

コダーイがハンガリー人をハンガリー人であるように教育したように、ほんとうの日本人であるために、日本人だけがもっているよいものがわかる能力を自分たちのあとの時代に伝えなくてはいけないのではないか、そういう役目もわれわれにあると思います。ですから現実的な現象だけの問題で、子どもがわらべ歌に拒否反応を示したから、わらべ歌はだめだというのは早計で、やはりもう一度考え直して伝統も教育の場にもちこんで、しかも外国のものも正当に評価したい、その両方をきちんとふまえるのがいいと思います。まだ問題はいっぱいあります。その欠点だらけのところで評価しているのです。何も完全主義であるのがいいというのではなく、それだからこそ人間的で時代からはなれないで硬直化しないで、いつでも生きていくものだと思います。日本もそういうものを作らなくてはいけない、これだけの責任感と情熱はやはり若い方に期待したいと思います。